ティーチング・ポートフォリオ

心理学科　鵜沼　秀行

（記入日：2024年　9月　1日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

心理学統計法（１年前期必修科目２単位）、心理学統計法（応用）（１年前期選択必修科目２単位）、心理学実験（基礎）（応用）（２年前期必修科目、後期選択必修科目、各２単位）、認知心理学概論（２年前期選択必修科目２単位）、心理統計法特講（１）（２）（大学院前期、後期選択必修科目、各２単位）など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、学生が科学的方法によって心を理解し、さらに自ら問題を具体的に設定し、身の回りの人的・文化的資源と積極的に関わりながら、主体的に問題解決に至る態度を身につけることである。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

今年度前期は昨年度までのMS365のTeamsを利用をさらに活用するとともに、対面授業ではより丁寧な説明に修正した。心理学統計法においては、学生が持参するPCでExcel
を使用させて統計計算を行わせた。その際に、教員もオンライン上のMS365で学生と同時に入力と計算を示し、学生の入力と計算の状況を把握しながら授業進行することとした。大学院の心理統計法特講では、TeamsのClass
Notebookを併用して、パワーポイント資料での概要説明、統計言語Rを用いてClass
Notebookによる計算結果の解説、さらにHPにおける計算プログラムを参照しながら学生による計算の実行の順序で授業を展開した。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

心理学統計法においては、エクセルファイルを事後に配布し、事後学修をうながした。学生による学修成果はForms課題で確認することができた。大学院でも、Teamsに課題を提出させ学修成果を確認できた。しかしこれらの教育効果は、受講生により開きが大きく今後の課題となった。（エビデンス１）。

５　今後の目標（これからどうするか）

学部年の統計、大学院の統計に共通する事項として、基礎的知識の理解と、実践的・応用的な問題解決技能の両方に課題があったこ。今後、より基本的な事項についての受講生の理解を確認するステップを設けるとともに、応用的な課題を加えて問題解決技能の修得を促したい。講義では、引き続き自主的な学修を促す試みを継続したい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１　Office 365 Teams 各科目のグループ（非公開）

２　Foms課題の結果（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科 氏名 田中 裕

（記入日：2025 年 2 月 27 日）

１ 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

「心理学概論（基礎）」「心理学実験（基礎）」「心理学実験（応用）」「心理実習（入門）」「「心理調査法」「生理心理学特講（1）」「生理心理学特講（2）」など。

２ 理念（なぜやっているか：教育目標）

教育理念・目標として、学生自身にも内在している身体および脳の視点から心を理解することを目指している。日常生活の中に根づいているこの視点を出発点として、自ら問題を具体的に設定し、身の回りの人的資源も使って主体的な問題解決に至る方向へ導くよう心がけている。さらに、自身の現状のレベルを認識させて、可能な限り個別対応をすることにより、学生の多様な個人特性に合わせた教育を行うように努めることも理念・目標としている。

３ 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

自身に内在する視点から主体的な問題設定から解決に至る機会を作るために、心理学概論（基礎）では可能な授業テーマ全てにおいて自身の身体を可能な限り意識させ、それが脳につながるようにした。その際に脳や身体についての補充的な学びを取り入れた。心理学実験（基礎）では、自身の身体感覚（重量感覚）を明確化して取り扱い、具体例提示を多くした。さらに相互協力によるレポート課題解決から、心と身体感覚の関連を検討させた。また、心理学ゼミナールでは受講生の個性に合わせた個別対応・個別指導の時間を長く取ることで、より綿密な指導を心がけた。

４ 成果（どうだったか：結果と評価）

心理学概論（基礎）では、受講者のレベルに応じた授業資料使用の効果もあり学修過程において心と身体・脳を関連づけて考えようとしていることは確認されたが、身体と脳の知識と現実の理解をつなげようとすることができない学生が見受けられた。心理学実験（基礎）ではレポート作成時に学生の現状レベルに合わせた別資料用意と具体例を多く提示したが、内容理解および学修成果が想定より上がっていないことが確認された。心理学ゼミナールでは受講者の個性に合わせた個別対応・指導が効果的であったため、学修成果が上がったことが確認されたが、学生の個人差が大きく集団での対応はかなり困難であった（エビデンス 1 および 2）。

５ 今後の目標（これからどうするか）

どの授業においても、主体的な問題解決する方向を向かせることはあまりできていなかったと判断する。その原因として一昨年度までの課題でもあった個人差の問題があると推測している。特に学生の基礎能力および興味に応じた受講レベルの設定が上手くできていなかったと思われる。昨年度もあった個別対応だけで補填できない事例も認められた。今後は学生のレベルに合わせた新たな資料を使用した事前事後学修をより積極的に促すこととする。それによりさらなる効率的な授業進行を工夫したい。

６ エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1 リアクションペーパー（非公開）

2 小レポート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

桂瑠以

（記入日：2024 年 9 月 11 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

「基礎ゼミナール」「心理学演習」「コミュニケーション論」「特殊実験演習」「心理調査概論」「特殊研究」「卒業論文指導」など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

教育理念・教育目標として，学生が心理学，とりわけ社会心理学領域に係わる学修を通じて，社会の様々な事柄に対して広く関心や問題意識を持ち，それらの問題を実証的・多角的に考え，主体的に問題解決を行い，社会に貢献していく態度や能力を身に付けられることを目指して教育を行っている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

学生が主体的・実践的に学修を進めることを目指して，授業法や教材等の工夫を行った。一例として，心理学演習などの授業では，文献検索・収集，発表資料の作成，レジメによる発表，討論を行い，各自が問題意識を持って学修し，学修成果を学生相互で共有し，学修を深められるように指導した。また心理調査概論などの授業では，グループでの質問紙調査，面接調査の実習を行い，調査の目的，調査方法，結果のまとめ方，データ処理の方法等を学修し，実際に調査を実施して，心理調査の方法や仕組みを実践的に学んだ。基礎ゼミナール，コミュニケーション論などの授業では，講義にあわせて，毎回，小レポート課題を課し，学修内容の深化を図り，また挙げられた質問には可能な限り次回の授業で回答や説明を行い，双方向でのやりとりになるように努めた。さらに，授業内容に応じてグループワークやグループ学習を取り入れ，グループで意見交換を行い，主体的に学修するように指導した。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

心理学演習，特殊実験演習，心理調査概論などにおいては，学生が主体的・実践的に学修を進め，授業時間外にも事前・事後学習を行い，教員からの指導や学生同士での支援を生かして，発表やレポート作成の質を高めていったことが確

認できた(エビデンス 1，2)。一方，学修成果や学修意欲に個人差が生じている様子も見られ，個別の支援をあわせて行いながら，そうした差異に柔軟に対応していくことが今後の課題と考えられる。

５　今後の目標（これからどうするか）

学生が，様々な社会事象や社会の問題に対して広く関心を持ち，自ら問題解決していけるような実践力を身に付けていくことが今後の目標に挙げられる。また，学修の意義や目的を理解し，自ら学修意欲を持って学修に取り組むよう，授業内容及び授業方法等を今後も工夫していくことが挙げられる。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1　小レポート課題，授業成果物(非公開)
2　前期末試験，期末レポート(非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科　佐藤 哲康

（記入日：2025 年 2 月 28 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

【心理学科専門科目】

青年心理学（2 年次半期：選択必修科目 2 単位）、心理実習（基礎）（3 年次通年：選択必修科目 1 単位）、心理学ゼミナール（3 年次通年：選択必修科目 4 単位）

【他学科専門科目・教職課程科目】

教育心理学（中高免許状 2 年次半期：必修科目 2 単位、児童教育学科 1 年次半期：必修科目 2 単位）、教育相談（中高免許状 2 年次半期：必修科目 2 単位、児童教育学科 2~3 年次半期：必修科目 2 単位）、

【大学院科目】

臨床心理面接特論Ⅰ（大学院半期：選択必修科目 2 単位）、臨床心理面接特論Ⅱ（大学院半期：選択必修科目 2 単位）、心理療法各論Ⅰ（大学院半期：選択必修科目 2 単位）、臨床心理基礎実習（大学院 1 年次通年：選択必修科目 2 単位）、臨床心理実習Ⅰ（1）（心理実践実習）（大学院通年：選択必修科目 2 単位）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

授業の理念や目標は学生が心理学または教育学の専門性を実践で活かすことのできる教育である。人材を育成するためには教科書だけではなく、臨床現場や地域での実践的な活動を通じて得られた、これまでの経験を現状に即して伝えることだと考える。教育を通じて得られた知識と社会に目を向ける応用力、柔軟な思考力と対応力を学生一人ひとりが身につけることも教育目標としている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

全ての担当科目において、授業内容をまとめた配布資料と授業で使用するプレゼンテーション資料を事前に Teams で公開し（エビデンス①）、事前学習がスムーズにできるように、授業内容を確認して疑問や意見を準備できるように活用した。また、テキストや参考書を指定している科目では併せて予習範囲を指定

した。

青年心理学では、学生自身が青年期の真っただ中で生活していることに目を向けてもらうために単なる理論の説明だけでなく、発達心理学と臨床心理学の両面から興味を持たせる工夫をしている（エビデンス②）

教育心理学と教育相談ではコアカリキュラムに沿った内容だけではなく、実務家教員としての学校臨床の経験（困難事例とその対応、多職種連携）を伝え、学生のスキルアップのイメージがつかめるように生徒役と教師役に分かれたロールプレイを取り入れた（エビデンス②）。

臨床心理面接特論では、心理専門職に必要な知識を享受するだけではなく、大学院生自身の意識や臨床実践の疑問に回答できるようにテキスト講読を減らして、積極的な授業参加と問題把握力が高まるような反転授業を取り入れる工夫をした（エビデンス②）。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

全ての科目において、授業終了後にリアクションペーパーの提出や Microsoft Teams へのコメントを求め、学生の理解とフィードバックを即時授業に取り入れた（エビデンス③）。事前学修の疑問や意見は授業内で回答し、リアクションペーパーやコメントについては必要に応じて Teams の各科目チャンネルに回答を掲示して、学生と共有した。

授業の工夫と取組みの結果、学生の理解と総合的な満足は授業評価アンケートから「そう思う 63.6%」「どちらかというとそう思う 32.9%」の回答が得られた（複数教員担当を除く）。「どちらともいえない」が 5～10%認められたことは、20 名以上の科目では学生の表情や反応、理解の確認が不十分だったと反省した（10 名以下の科目では理解と満足が共に 100%であった）（エビデンス④）。その他、授業の工夫と取組みの結果として「教材の効果的な利用」、「授業に対する熱意と真剣さ」の項目において、学生から高い評価を得られた。

５　今後の目標（これからどうするか）

来年年度は年間通じて学生の表情や反応、理解の確認を意識しながら授業を行っていきたい。学科専門科目・教職科目において、20 名以上が履修する場合でも学生一人ひとりの声に耳を傾けよう工夫する。2023 年度の反省に挙げた学習と理解の定着が授業時のみの短期的なものにならず、長期的なものになった

ことは試験の評価点や回答から例年と同様のものに回復したと感じている（エビデンス⑤)。引き続き、学習と理解が長期的なものになるような手段を考えていきたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

① 授業で使用する配布資料とパワーポイント（学生のみ公開）
② 2023 年度授業シラバス（公開）
③ 提出されたリアクションペーパーと Microsoft Teams へのコメント(非公開)
④ 学生授業評価アンケート（公開）
⑤ 学生が回答した試験の答案と評価点の結果（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ （記入日： 2025 年 2 月 5 日） 簑下成子

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

心理学ゼミナール（3 年通年必修科目 4 単 位）、臨床心理基礎実習（大学院通年必修科目 4 単位）、臨床心理実習 II（大学院通年必修科目 4 単位）、 臨床心理査定演習 I,II（大学院 前期、後期必修科目、各 2 単位）深層心理学 I（大学院前期、後期選択科目）等

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

教育理念・目標は、学生が臨床心理学の知識と実技を座学と演習、実習により 習得し、習得した技術を心理援助に実践できることである。心理臨床専門家と しての援助技法を習得する。さらに、臨床心理的援助法の開発と研究手法も身 につける。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

演習授業の場合、学生が主体的に学べるように、実際にプレイセラピー実施前後の気分変化の採取データ等を用いて各種療法の効果などを記述させる。また、各種心理尺度を体験しフィードバック用のレポートを書くよう指導した。実習授業の場合、複数教員担当の授業などでは、教員同士のロールプレイを観察させた後に学生同士のロールプレイを実演し、振り返り、ディスカッションなどを経て心理臨床専門家としての技術を研鑽させた。心理査定演習、深層心理学では、受講者本人の心理テストや芸術療法を行い、解析方法を指導し、本人が自分の心理検査結果や芸術療法の深層心理を解釈し、それによって臨床家としての自分を把握し、より援助者としてふさわしい資質を延ばすように工夫した。心理テストの結果は個人情報に触れるため、教員と一対一でのフィードバックを実施した。また、臨床上、本人が注意すべき点、今後伸ばすべき能力を大学院生と双方向でディスカッションすることで、心理相談センターでのケース担当の準備とした。一方で芸術療法は集団療法等で自分と他者の違いを楽しんだりアイデンティーティーの確立に役立つ場合もある為、受講者が全員居る場で本人の解釈を自分で行わせた。それにより集団療法のファシリテーターを任せられるように工夫した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

演習授業の場合、文献検索の手助けが必要であった。レビューを行うことはできた。しかし、問題を見出し、研究計画を立てることに困難を感じる学生が存在した為、個別指導を心がけ問題は解消した。さらに、犯罪心理学をメインとした平間講師が入植した為、平間講師と簑下の役割を明確にし、犯罪心理学も学べる心理学ゼミナール（平間ゼミ）と芸術心理学も学べる心理学ゼミナール（簑下ゼミ）と分けて実施した結果、スムーズな運営が出来た。実習授業の場合、学生が実際に模擬面接を行い、インタビュー方法、利用者とのかかわり方、表現方法などを学ぶことができた。コロナ禍を契機に始めたが、オンラインによる SV 陪席で大学院卒業生達の内容の濃い実践的な話を聞いてディスカ

ッションする実習を継続している。将来現場で知っておくべきこと、立ち居振る舞い、支援内容などを解説してもらった。そのことにより内容 は踏み込んだものになり、単に見学に出かけるよりも現場で起こりがちなトラブルや失敗をカバーする手法や、回避する技術をも学ぶことができた。深層心理学の芸術療法のスキルはそのまま心理相談センターのコラージュ集団療法に反映され、受講した学生達が活躍してクライエントのケアにあたり、 好評を得ている。

5 今後の目標（これからどうするか）

演習授業で授業外に個別に資料収集とレポート作成を行う機会を増やす。またより個別指導を丁寧に行い、ゼミナールの中でも就活スキルと連動する心理学を応用した集団療法的アプローチを行いたい。具体的にはゼミ内でなじみはじめる後期からポジティブな他者評価を送りあい、履歴書に書くべき長所のデータとしてもらう。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

リアクションペーパー(非公開）
心理相談センター管理運営委員会議事録（非公開）
川村学園女子大学心理相談センターHP（公開）
集団コラージュ療法のご案内(２０２４年５月～） ｜ 投稿 ｜ 川村学園女子大学

ティーチング・ポートフォリオ

松岡靖子

（記入日：2024 年 9 月 11 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

学部：発達心理学（２年後期必修科目２単位）、社会・集団・家族心理学（２年前期選択必修科目２単位）、教育・学校心理学（２年後期選択必修科目２単位）、心理演習（３年通年公認心理師科目４単位）など

大学院：臨床心理実習Ⅱ（大学院２年通年選択必修科目２単位）、心の健康教育に関する理論と実践（大学院１年前期選択必修科目２単位）など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

学生が心に関する幅広い知識を得ることによってその知識を通して学生自身の経験や世の中で起こっている問題を新たな視点から見つめ直し、更に主体的に問題解決の方策を探っていく方法と態度を身につけることを目標として教育を行っている。それにより川村学園女子大学が目指す、激しく変化する社会を柔軟に乗り越えるための「教養」を身に着けた自覚ある女性を育成することができると考えている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

どの講義においても、学生が心理学の知識を自分の経験や世の中の問題とつなげて理解することができるように、知識とつながる具体的な例を多くあげたり、視聴覚教材を利用したりといった工夫を行い、解説している。また、グループワークを取り入れ、自分の考えを伝え、他者と共有し、更に考えを深めるという経験を重視している。

新たな工夫として今年度から担当した「社会・集団：家族心理学」においては授業後にその回の講義で出てきた社会心理学的な事象について、当てはまるような自分の経験を振り返り、Microsoft Teams の Forms に記入するというミニレポートを課した。優れたミニレポートについては後日公開し、全員がよりブラッシュアップした回答が作成できるように促した。加えて Forms に記入された質問は可能な限り次回講義のはじめに取り上げて回答し、疑問を残しておかないようにするとともに、一方通行ではなく相互のやり取りで講義が構成される

という実感を学生にもたせるように工夫した。

同じく今年度から担当した大学院科目「心の健康教育に関する理論と実践」については、公認心理師の勤務する５領域に関してそれぞれの心の健康教育について講義したのち、２グループでそれぞれその領域の心理教育のプレゼンテーションを作成し、代表者が発表するという形式をとった。全員が１回ずつ研修講師として研修を行うことの模擬経験をすることで、受講者が修了後に実際に研修講師を依頼されたときにスムーズに実践できることを目指した。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

「社会・集団・家族心理学」のミニレポートについては学生がはじめは困難さを感じながらも、それぞれ自分の経験とつなげ合わせながら理解を深めていることが Forms のコメントで確認された（エビデンス１）。

「心の健康教育に関する理論と実践」では最終課題として授業を経てブラッシュアップした心理教育の研修資料の提出を求めたが、実際に現場で実施することができるレベルの心理教育が提出された（エビデンス２）。

５　今後の目標（これからどうするか）

学生がより社会的事象に興味関心を持ち、心理学的視点から考えることができるように事前事後学修を設定し、具体的に促していく。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１．Forms 記録（非公開）

２．「心の健康教育に関する理論と実践」提出課題（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

松岡靖子

（記入日：2025 年 2 月 26 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

後期科目

学部

教育・学校心理学（２年選択必修科目、２単位）

心理演習（３年通年公認心理師科目、４単位）

ライフプランニング（共通教育科目、２単位）　など

大学院

臨床心理学実習Ⅱ（大学院２年通年必修科目、２単位）　など

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

昨年度に引き続き、学生が心に関する幅広い知識を得ることによってその知識を通して学生自身の経験や世の中で起こっている問題を新たな視点から見つめ直し、更に主体的に問題解決の方策を探っていく方法と態度を身につけることを目標として教育を行っている。それにより自らの将来像の模索に積極的に関与し、進路について考えることのできる「教養」を身に着けた自覚ある女性を育成することができると考えている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

どの講義においても、学生が心理学の知識を自分の経験や世の中の問題とつなげて理解することができるように、知識とつながる具体的な例を多くあげたり、視聴覚教材を利用したりといった工夫を行い、解説している。また、グループワークを取り入れ、自分の考えを伝え、他者と共有し、更に考えを深めるという経験を重視している。

後期共通教育科目のライフプランニングにおいては特に主体的な学びを重視している。心理検査を行って自己分析に結び付けた上での自己 PR の作成、就職支援室の見学、ライフサイクルゲームを用いたグループワークなど実際に身体も動かして関わる時間を多く設定している。また、それぞれが興味のある職業・資格・企業などについて１つ自分で決定して調べ、発表するという課題を作って

いる。短時間ではあるが、1年生から発表の機会を作ることで今後の準備につながると考える。

教育学校心理学などの講義中心の科目においては教科書の要点をつかむためのプリントを作成し、教科書と自作のプリントを併用しながら講義を行った。また Microsoft Teams の Forms を用い、1回の講義ごとに授業の振り返りコメントの入力を求め、リアクションペーパーの代わりとした。Forms に記入された質問は可能な限り次回講義のはじめに取り上げて回答し、疑問を残しておかないようにするとともに、一方通行ではなく相互のやり取りで講義が構成されるという実感を学生にもたせるように工夫した。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

講義形式の授業については、学生がそれぞれ自分の経験とつなげ合わせながら理解を深めていることが Forms のコメントで確認された（エビデンス１）。しかし、その分一部「自分の経験を振り返り苦しくなった」という感想が見られ、学生のケアの必要性が感じられた。

また、昨年度に引き続き 2 年生・3 年生のキャリアプランニング履修者が例年と比べ少なかったことからも、ライフプランニングでの学びが進路への積極的な関与には繋がっていない可能性がある。今年度は進路選択に向けて自己 PR の作成の時間を増やすなどの取り組みを行ったが、それがかえって履修者の「やりたいことが見つからない」という焦りにつながるところがあり、授業評価も下がるという結果があった（エビデンス１，２）。この点についても学生のケアの必要性が感じられるところであり、来年度の課題である。

５　今後の目標（これからどうするか）

学生がより社会的事象に興味関心を持ち心理学的視点から考えることができるよう、そして更に自己理解を深め進路選択に積極的に関与できるように事前事後学修を具体的に設定し、自主的な学びを促していく。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

１．Forms 記録（非公開）

２．川村学園女子大学令和 6 年度後期授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科　　氏名　平間　さゆり
（記入日：2025 年　　2 月　26 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

「心理的アセスメント」「心理学特殊講義Ⅰ」「司法犯罪心理学」「心理実習（入門）」「心理実習（応用）」「心理学ゼミナール」「臨床心理実習Ⅰ（１）」「臨床心理実習Ⅰ（２）」「臨床心理実習Ⅱ」

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

公認心理師を目指している学生には、資格取得に向けたクライエントを理解するためのアセスメントや心理検査の基礎知識、試験に関する多様な知識が身に付くことを目指している。実習では、どの様な施設で実習をするのか事前に調べ、その情報を基に実際に実習を施設で行い、その後に実習で何を学び、自身がどの様な態度であったかを振り返っている。これは、「問題提起→実行→結果→反省と課題」という一連の流れになっており、心理師となりこの実習経験を活かすことはもとより、物事の解決や社会人になって業務を行う際に必須なこのスキルが獲得できることを目指している。このような指導により、学生それぞれの目的や学びの到達、さらに個人特性が成長できるよう適切に促すことを理念としている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

公認心理師の試験科目については、必要な知識の習得を目指し、重要語を複数回授業の中で繰り返して定着を促している。分かり易い資料を作成し、必要なことを強調して示し、専門用語を理解できるよう講義している。また、心理学特殊講義Ⅰでは、心理検査で所見を作成するためには、何に注目して、どの様なことをまとめあげるかについてグループでディスカッションして発表している。このことにより、心理師がどのようなフィードバックをすると、クライエントにとって役立つ支援となるかについて学べるよう指導している。

実習の授業においては、特に「心理実習（入門）」では、初めての実習を行う前に、グループワークが円滑にできるようアイスブレイクなどを用いてコミュニケーションを促している。また、実習に行く前の事前学習において、実習に行く前に服装、髪型、持ち物、などの身だしなみ、施設の職員の方々への挨拶やコミュニケーションの取り方について、事前に指導してから実施している。さらに、保育園実習では、実際に園児に絵本を読み聞かせて、手遊びをするなどを各グループで企画して行っている。子供の発達に合わせた絵本や手遊びを考えることで、実際に実習で園児と関わる際に必要なコミュニケーションがとれるよう指導している。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

公認心理師の試験科目では、課題レポートにおいて授業の主旨や説明がよく理解できているものが多くみられた。文献なども調べて、課題に対して自分の意見だけでなく引用しながらエビデンスのあるレポートを作成していた。また、試験を実施すると平均点が高く、学生の学びが定着していることが示されていた。さらに、心理検査を丁寧に実施する授業では、時間をかけて指導したことにより、学びが深まり興味が増したとの声が学生からあがった。

実習については、「心理実習（入門）」で実習を行った際に、園児に対して積極的に関われていたことや、自分たちで企画した絵本の読み聞かせや手遊びができていた。一方、大学院の実習では、長期の実習を行うため、実際にどのようなことを目的や狙いとして実習を行い、どのようにクライエントや利用者の方々と関わるといいかについて、実習前に自ら発表してから実習を始めている。このことから、各大学院生は実習先で公認心理師や臨床心理士の資格をとって仕事ができることを想定した実習を行っている。このように授業内の準備があることにより、スムーズに実習に参加することができ、クライエントや利用者への適切なアセスメントや関わりが築けている。また、実習施設の職員とも円滑にコミュニケーションをとって実習が出来ていることについて、実習指導者から評価を受けている。

５　今後の目標（これからどうするか）

１）「司法犯罪心理学」の授業においては試験の平均点は高いが、翌年の「心理実習（応用）」の授業で保護観察所に行くための事前学習を行った際、保護観察所や社会で元犯罪者をどう受け入れるかの話など忘れていることが多かった。司法犯罪心理学の知識が一時的な定着であると認められたため、定着を促すために自ら考えて発表することを試みたい。例えば、今週に授業で習った重要語などについて、授業の初めに「復習」として学生が順番に説明することなどを取り入れ、繰り返すこと、自ら発表内容をまとめる作業により、知識の定着を図る。（予習は、自分が間違っているかも知れないという不安が生じるため復習内容を主とする）

２）学部の実習では、事前学習により実習先での質問など行動には問題はなかったが、4年時の「心理実習（応用）」において、服装の問題（1件）、遅刻（3件）がみられた。この時期の実習なので、基礎的な事については出来るはずだが、遅刻は 3 件とも数十分を超えており、実際にその学生には後から一人で来てもらっており、実習施設の方にもご迷惑をかけた。実習先までのルートや集合場所・時間については授業で案内しているが、実際に学生がどのルートで来るかは確認していなかった。遅刻者がないよう徹底するには、一人ずつどのようなルートで実習に来るかについて、確認することでまずは適切なルートを示すことが出来る事、また、ルートを知ることで、どのくらいの遅れで参加できるかの予測にもつながる為、交通機関の説明、遅刻することで何が問題なのか等について、今まで以上に徹底した指導を行う。4年生だからと安心せずに、常に実習では、初回と同じように気を抜かない指導を心がける。

３）大学院の実習においては、ほぼすべての実習生が、実習指導者から高評価を得ており、公認心理師や臨床心理士として働くことが見込める状況ではある。しかしながら、一部の実習では、社会人経験が豊富なため、ベテランであれば許されるような態度をついとってしまうことがあった（実習指導者よりも前に出て明るく大きな声で声援を送る、利用者へ心理支援というより指導者的な態度をとる）。これは、これまでの社会人経験では、むしろ好ましい行動であったが、心理の実習生としては好ましくない態度である。

今後は、社会人学生については、改めて心理の実習生の在り方を指導し、これまでの経験の活かし方について個別に検討するなど、事前学習においてロールプレイなどを実施し、実習先での場面を想定して心理師としての振る舞いをさらに詳細に指導していく。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

①　学生授業評価アンケート（非公開）
②　課題レポート（非公開）
③　教員による授業評価アンケート
④　学生の試験答案
⑤　実習指導者の評価シート
⑥　授業内で配布した資料とパワーポイント